

必携
万葉集要覽

桜井 満 昭和8年、東京都生れ。
国学院大学教授、文学博士
平成7年2月没

高橋六二 昭和15年、新潟県生れ。現在、
跡見学園短期大学教授

並木宏衛 昭和17年、東京都生れ、現在、
武蔵野女子大学教授

石上七鞆 昭和22年、東京都生れ。現在、
東京女学館短期大学教授

尾崎富義 昭和22年、大分県生れ。現在、
常葉学園短期大学教授

必携万葉集要覧

昭和五年六月二五日 第一刷発行
平成二年九月二五日 第二五刷発行

編修者 桜井 満

発行者 坂倉 良一

〒101-0064 東京都千代田区猿樂町一―三一―

(株)おふう

(〇三)三二九五―八七七―(営業)
三二九五―八七七―(編集)
振替〇〇一四〇二―六六五二―四二

Printed in Japan
検印省略

印刷 三恵印刷 ISBN4-273-00067-9

造本には充分注意しておりますが、落丁・乱丁などございましたら、発行所かお買上げの書店にておとりかえします。

定価は函に表示してあります。

桜井 満編修

高橋 六二
並木 宏衛
石上 七韜編
尾崎 富義

必携 万葉集要覽

おうふう

は し が き

一、本書は、『万葉集』の講読・演習上必須と思われる事項について概説し、図表化したものである。特に〈万葉集ハンドブック〉として、ひろく万葉愛好者に提供できるよう心掛けた。

一、本書は、はじめに『万葉集』の概説を掲げ、「総説篇」「社会・民俗篇」「人名篇」「地名篇」「年表篇」「図表篇」の六篇から成っている。各篇ごとにその凡例を掲げた。

特に、人名篇・地名篇は、人名・地名による〈万葉集索引〉の役割を果たすことができるようになっていく。

一、本書が基にした『万葉集』の本文は、鶴久・森山隆編『万葉集』（桜楓社）によった。なお、訓み下し本文は桜井満訳注『現代語訳万葉集』（旺文社文庫）によった。

両書ともその底本は西本願寺本である。

一、本書の企画・編修には桜井があたり、高橋六二・並木宏衛・石上七韜・尾崎富義がこれに参画した。原稿の執筆・整理、内容の討議にあたっては、次の諸君も参加した。

熊谷春樹 岩下 均 相良浩文 神田正美

一、本書を成すにあたっては、先学の多大な業績に負うところが多い。ここに謹んで謝意を表したい。

昭和五十一年春

編 修 者

目次

はしがき	3
概説	7
一、名義と成立	7
二、構造	8
三、用字法と特殊仮名遣	10
四、写本・研究史	11
付、各巻一覧	13
総説	27
社会・民俗篇	33
人名篇	71
地名篇	120
年表篇	158

図 表 篇

宮 都 一 覧	230
国府・国分寺・国分尼寺一覧	233
社 寺 一 覧	236
御 陵 一 覧	239
地	244
系	254
万葉仮名一覧	260
万葉語活用表	268
主要古写本一覧	272
主要古注釈書一覧	278
官 制 表	283
古代冠位変遷表	284
万葉集諸本系統図	119
官位相当表	

概説

一名義と成立

『万葉集』は現存するわが国最古の歌集である。それは古代国家のあけぼのの時代から華やかな天平文化の花開いた奈良時代中期に及ぶ、公私さまざまな場における詩的経験の記録で、質量ともに日本文学の代表的古典である。

現在、『万葉集』は一般にマンヨウシュウと読まれているが、マンニョウシュウというのが古典的な読み方であったのかも知れない。この名称の最も古い仮名書きの例は、『古今和歌集』の仮名序に「万えふしふ」とあるもので、これを連音上の法則に照らしてみると、*man-fo-si-ru→man-fo-si-ru→man-fo-si-ru* と変化するはずであるから、少くとも古今の時代には、マンニョウシュウといわれたものとみられるが、果たして万葉の時代に、マンニョウという連声の現象があったかどうか、確認できないのが現状である。

この『万葉集』の名称については、仙覚以来、幾多の論議が展開されて来たが、次の二説六論に整理してみることができる。

(一) 万の歌の集

(1) 「葉」は「言の葉」のことで、万の言の葉の集。仙覚『万葉集註釈』など。

(2) 「葉」は「木の葉」のことで、歌に譬えたもの。秋成『檜の杣』、岡田正之『近江奈良朝の漢文学』など。

(3) 「葉」は紙を数える時の助数詞で、多くの紙数の集。武田祐吉『万葉集新解』。

(二) 万世の集

(4) 万世の後まで伝われと祝福したもの。契沖『万葉代匠記』、小島憲之『上代日本文学と中国文学』など。

(5) 古今の歌を収め、万世の後まで伝われと祝福したもの。山田孝雄『万葉集考證』。

(6) 天皇の御世万歳を祝祷する歌の集。折口信夫『古代研究』、桜井満『現代語訳 万葉集』(旺文社文庫) など。

以上の内、(1)の(1)説は、長流(『万葉集抄』)、春満・真淵(『万葉考』)などが従って、近代に至るまで有力な説であったが、山田孝雄「万葉集名義考」(『万葉集考證』所収)によって、「葉」が「言の葉」の意に用いられるようになったのは、平安中期以後であることが明らかにされ、完全に否定された。また(2)の(2)説は、巻十八に家持が紙端の意に「葉端」の語を用いているのであるが、武田祐吉自身(3)の(3)説に従うべきであろうとしながら示された試案である。他の四説は、和漢の用例からいづれも可能性を持っていないが、それぞれに難点が指摘され、未だ定説をみないところである。

撰者・成立についても、未だ定説をみないが、現在の学問の俎上にのせ得る古来の諸説は、次の二説に代表させることができる。

(一) 平城天皇の勅撰

貞観の御時、万葉集は何時ばかりつくれるぞと問はせ給ひければ、詠みて奉りける 文屋有季

神無月時雨ふりおける ならの葉の名に負ふ宮のふることぞこれ 『古今和歌集』 卷十八の九九七

いにしへよりかく伝はるうちに、ならの御時よりぞひるまりにける。かの御世や歌の心をしろしめしたりけむ。かの御時に、正三位、柿本の人丸なむ、歌の聖なりける。これは、君も人も、身をあはせたりといふなるべし。秋の夕、竜田河に流るるもみぢをば、帝の御目には錦と見たまひ、春の朝、吉野の山の桜は、人丸が心には、雲かとのみなむおぼえける。又、山辺の赤人といふ人ありけり。歌にあやしうたへなり。人丸は赤人が上にたゝむ事かたく、赤人は人丸が下にたたむこと難くなむありける。この人々をおきて、又すぐれたる人も、呉竹の世々に聞え、片糸のよりよりに絶えずぞありける。これよりさきの歌を集めてなむ、万えふしふと名づけられたりける。ここに、いにしへのことをも、歌の心をも知れる人、わづかに一人、二人なりき。しかあれど、これかれ、得たるところ、得ぬ所、互になむある。かの御時よりこの方、年は百年あまり、世は十代になんなりにける。

(同、仮名序)

昔、平城天子詔侍臣、令撰万葉集。自爾來、時歷十代、數過三百年。

(同、真名序)

(二) 大伴家持の私撰

今此定家卿ノ抄(注、『長歌短歌之説』)ヲ見テ、心著テ普ク集中ヲ考ヘ見ルニ、勅撰ニモアラス、撰者ハ諸兄公ニモアラスシテ、家持卿私ノ家ニ若年ヨリ見聞ニ随テ記シオカレタルヲ、十六卷マテハ天平十六年十七年ノ比マテニ、廿七八歳ノ内ニテ撰ヒ定メ、十七卷ノ天平十六年四月五日ノ歌マテハ遺タルヲ拾ヒ、十八年正月ノ歌ヨリ第二十ノ終マテハ日記ノ如ク、部ヲ立ス、次第ニ集メテ宝字三年ニ一部ト成サレタルナリ。

(契沖『万葉代匠記』精撰本)

近代における成立論は、古今以来の平城天皇勅撰説と契沖の『万葉集』の内容に即した大伴家持私撰説とを勘案しながら深められて来た。しかし、『万葉集』は、長い時をかけて複数の人による数次の撰を経て二十巻が完成していること、その最終撰は宝龜二年(七七二)以後であること、編纂の關係者として家持がいたこと、などがほぼ確認されるところまで来たが、誰が、なぜ、どのようにして編纂したか、ということは未だ定説を得ないのである。

二 構 造

『万葉集』の原本は伝わらないが、初めは二十巻の巻物から成

つていた。その二十巻はそれぞれ趣を異にしているが、巻一から巻十六までと、巻十七から巻二十までとに大きく分けられる。すなわち巻十七以下四巻は、部立されておらず、大伴家持の歌日記というべきもので、聖武天皇天平二年、十年、十二年、十三年、十六年の歌のあと、天平十八年（七四六）正月の応詔歌以下、ほぼ年月を追って、淳仁天皇天平宝字三年（七五九）正月一日の寿歌で終っている。巻十六までの歌は、天平十六、七年の歌で終っており、ここに明らかな断層があるといえよう。

巻一と巻二の二巻は、ひとまとまりになっている。すなわち巻一は「雑歌」、巻二は「相聞」と「挽歌」から成り、両巻合わせて本集の基本的な部立がそろう。その上、宮廷関係の格調の高いいわゆる〈万葉ぶり〉の歌が多く、これを天皇の御代ごとに年代順に配列しようとしているのである。額田王や人麻呂の公的な場の歌は、ほとんどこの両巻に収められている。集中最も整理された〈古撰の巻〉と認められる。この二巻だけを勅撰とみる説もあるくらいだ。その拾遺・続撰の上に大伴氏関係の歌を加えた形で、巻三（雑歌・譬喻歌・挽歌）と巻四（相聞）がある。巻五は「雑歌」と部立しながら、明らかに相聞や挽歌にあたる作を含むが、筑紫における旅人と憶良を中心にした、漢詩文の影響を濃厚にみせる巻である。そうした新風の巻に対して巻六は、宮廷関係の伝統的な「雑歌」の巻で、巻一の続撰と言えよう。

次に、巻七（雑歌・譬喻歌・挽歌）は、長歌はなく、ほとんど作者不明の短歌と旋頭歌で、雑歌に「詠物」の歌、譬喻歌に「寄物」

の歌がある。巻八は、「雑歌」「相聞」を春・夏・秋・冬の四季に分類した巻である。巻十が同じ分類法で、作者不明の作を収めている。巻九は、「雑歌」「相聞」「挽歌」の三大部立から成る唯一の巻で、巻一・二の拾遺の観がある。万葉に先行する古集・人麻呂歌集・金村歌集・虫麻呂歌集・福麻呂歌集から歌を採録し、類聚歌林による注記もみられる。旅と伝説に関する歌が多く、特に虫麻呂歌集所出の歌は注目される。巻十一と巻十二は、目錄に、「古今相聞往来歌類之上」、同じく「下」とあって、目錄編成当時は一組のものとみられたらしい。共に近畿地方を中心にした民謡的な歌の集成で、相聞歌範例集の観がある。巻十三は、「雑歌」「相聞」「問答」「譬喻歌」「挽歌」の五部から成る長歌集である。作者不明の巻で、古歌謡の流れを伝えるものが多い。巻十四は、〈東歌〉と標題され、遠江・信濃以東陸奥に及ぶ東国民謡の巻で、謡われた国名判明歌を「雑歌」「相聞」「譬喻歌」に分けている。東国民衆の生きた歌声の集成は、集中最も特異な存在である。巻十五は部立をほどきしていない。前半は天平八、九年の遣新羅使人等の作、後半は天平十一年ころの越前国配流をめぐる中臣宅守と狭野弟上娘子との贈答歌で、羈旅歌の集といえる。巻十六は「有由縁雑歌」、すなわち作歌の事情を伝える歌の巻である。特に伝説歌は、後の歌物語を思わせ、戯笑歌や詠物歌などがあり、特異な巻を成している。

巻十七以下の〈家持の歌日記〉といわれる四巻の中では、巻十

九の巻末に、巻中作者名を記さないものはみな家持の作であるという注があり、巻二十には天平勝宝七歳の防人歌が収められている。

なお、「目錄」は、本文成立の後に付せられたもので、その時を以て『万葉集』の成立の時とすべきであるかも知れない。また以上二十巻中、一字一音式の仮名書きを原則とする巻は、巻五・十四・十五・十七・十八・二十の六巻である。

万葉の歌は、「雑歌」「相聞」「挽歌」という歌の場や内容による部立を基本にし、表現技法による「譬喩歌」、形態による「問答」の部も立てられている。なお「相聞」はさらに「正述心緒」「寄物陳思」「羈旅発思」「問答」「譬喩」などに細分されたりしている。また歌体は、「短歌」「長歌」「旋頭歌」のほかに「仏足石歌体」「連歌体」も認められる。部立・歌体のそれぞれについては、総説篇を参照してもらいたい。

さて、万葉には、巻二の巻頭に収められた仁德天皇の皇后磐姫の御歌と伝えられるものから、巻二十の巻末に据えられた因幡国守大伴家持の淳仁天皇天平宝字三年（七五九）正月の歌まで、その間、実に四百数十年にわたる歌が伝えられる。しかし推古朝以前の作は、磐姫皇后のほか巻一の巻頭に雄略天皇、巻三の挽歌冒頭に聖德太子の作と伝えるものなどがあるにすぎない。ほぼ切れ目なく続けて歌が収められているのは、舒明朝（六二九―六四一）以後であり、この一三〇年間で真の万葉の時代である。

この万葉の時代を、『万葉集』そのものとその歌の歴史を中心

に、時代史を考慮しながら分かつと、大きく二分することができ。まず古代的な歌の世界を集成した柿本人麻呂の歌が見えなくなる時であり、代わって大伴旅人や山上憶良などの新しい文学が登場する時である平城遷都（七二〇）を境にして、前期と後期に分けられる。これをさらに二期ずつに分けて全体を四期に区分するのが普通である。

第一期 額田王の公的な歌を中心にした時代で、壬申の乱（六七二）まで。

第二期 宫廷歌人の柿本人麻呂や高市黒人が活躍する時代で、奈良に遷都（七二〇）するまで。

第三期 宫廷歌人の笠金村や山部赤人の活動のあとが見えなくなり、橘諸兄時代に転換する天平九年（七三七）まで。

第四期 大伴家持の活動を中心にした時代で、天平宝字三年（七五九）まで。

三 用字法と特殊仮名遣

『万葉集』では、題詞・左注は漢文で書かれているが、歌は大和言葉や漢字で表記している。それも漢字の音だけを表わしたいわけに「万葉仮名」ばかりでなく、例えば「君」「芽子」以上、正訓、「暖」「未通女」（以上、義訓）、「神祇」「古昔」など、国語の意味に相当する漢字を用いたものや、「餓鬼」「法師」など、漢語をそのまま用いたものもある。

いわゆる「万葉仮名」は次のように分類されている。

(一) 音仮名 漢字の音を借りたもの

(a) 一字一音 (漢字一字で一音節を表わすもの。以下同じ意味)

(i) 正音 (例) 阿^ア 米^ミ 呂^ロ 乎^フ

(ii) 略音 (例) 吉^キ 年^{ネン} 万^{マン} 欲^{ヨク}

(b) 一字二音 (例) 南^{ナン} 念^{ネン} 藍^{ラン} 越^{エツ}

(二) 訓仮名 漢字の訓を借りたもの

(a) 一字一訓

(i) 正訓 (例) 千^チ 羽^フ 日^ヒ

(ii) 略訓 (例) 市^チ 跡^{セキ} 常^{ジョウ}

(b) 一字二訓 (例) 鶴^{ツル} 鴨^{カモ} (共に名詞ではなく付属語)

(c) 二字一訓 (例) 鳴呼^{ネコ} 五十^{イソ}

なお、「戲書」の類もかなりみられる。

(i) 数字組合せ (例) 二^ニ 重^シ 二^ニ 五^イ 十^{ジュウ} 十六^{ジュウロク} 八十一^{ハチジュウイチ}

(ii) 擬声 (例) 牛^{ウシ} 鳴^ネ 馬^{ウマ} 声^{コエ} 蜂^{ハチ} 音^ネ 追^{オヒ} 馬^{ウマ} 喚^{ウツ} 犬^{イヌ} 喚^{ウツ} 鶏^{トリ}

(iii) 遊戯関係 (例) 折木^{セキ} 四^シ 一^{イチ} 伏^フ 三^{サン} 起^キ 三^{サン} 伏^フ 一^{イチ} 向^{キョウ}

(iv) 字形分析 (例) 山上^{サン} 復^フ 有^ユ 山^{サン}

など、文字に対する高度な教養に基づくとみられるものがある。

遊戯関係の「折木四」(6 五) は、「切木四」(10 三三) ともあり、

中国・朝鮮を経て伝わったばくちの一種「樗蒲」(ちよぼ) の采のこ

とで、四枚の薄く削った小木片の一面を白、反面を黒に塗り、振

って出た面の黒白の組合せによって勝負を決めた。「一伏三起」

(12 五六) は、「一伏三向」(13 三六) ともあり、その采の目の名から取った戲書で、一つだけ裏、三つ表が出るのをコロと言ったのである。また「三伏一向」(10 六五) すなわち一つだけ表の場合はツクと言ったのであった。字形を分析した「山上復山有り」(9 三六) は、山を二つ重ねた「出」字を表わしたのであり、謎のようなものである。

いわゆる「万葉仮名」では、「いろいろは仮名」では区別しない書き分けが行われている。その一つは音の清濁で、清音を表わす仮名と濁音を表わす仮名とは種類を異にしていた。またいわゆる「上代特殊仮名遣」があり、いろは仮名においてそれぞれ一種類であるエ・キ・ケ・コ・ソ・ト・ノ・ヒ・ヘ・ミ・メ・ヨ・ロ「古事記」ではそも) およびこれらの濁音、ギ・ゲ・ゴ・ゾ・ド・ビ・ベにあたる万葉仮名が、それぞれ二つの類に書き分けられている。それは語によって書き分けられているのである。すなわち仮名の違いは、音の違いであり、意味の違いであった。この二つの類を、甲類、乙類と呼ぶ。例えば、「髪」や「上」「守」は「可美」であり、「神」や「雷」は「可未」「加微」であって、「美」と「未・微」は入替わらないが、「未」と「微」とは入替わることがある。「美」は甲類のミ、「未」や「微」は乙類のミである。

四 写本・研究史

『万葉集』の写本には、平安時代に書写されたものが五本(桂

本・金沢本・藍紙本・天治本・元暦校本）、鎌倉時代書写のものが六本（尼ヶ崎本・嘉暦伝承本・伝王生隆祐本・西本願寺本・紀州本・春日本）あり、室町時代以降のものは数十本伝来している。「桂本」は、もと桂宮家所蔵になるもので、八色の緋色紙に金銀泥で花鳥草木を描いたものに書写した卷子本である。巻四の一部が伝えられる。筆者は紀貫之説をはじめ数説あり、未詳であるが、現存最古の写本である。「元暦校本」は、巻一・二・四・六・七・九・十・十一・十二・十三・十四・十七・十八・十九・二十の十五巻が伝えられ、巻十に元暦元年（一一八四）に校合を終えたという奥書がある。伝えられる巻が多く、校合書入れもあって特に学術的価値が高い。「西本願寺本」は、鎌倉時代後期の書写であるが、二十巻完備の最古の写本である。現在、『万葉集』の底本として広く用いられている所以である。

『万葉集』の歌は、漢字によって表記されているので、平安初期にはすでに読みにくくなっていた。村上天皇は、天曆五年（九五）に、梨壺の五人、すなわち源順・大中臣能宣・清原元輔・紀時文・坂上望城に、訓を付けることを命じ、大部分の歌に訓点を加えられた。これを「古点」という。この古点に漏れた歌には、平安から鎌倉の初期にわたって、藤原道長・大江佐国・惟宗考言・大江匡房・源信・源師頼・藤原敦隆等が訓点を加えた。これが「次点」といわれる。さらに鎌倉において仙覚が一五二首に加点した。これが「新点」である。以上で万葉の歌のすべてに訓が付けられたのであったが、仙覚以後もなお古点・次点・新点を改訂

する努力が続けられて現在に至っている。

仙覚はまた諸本を比較して本文を制定した。いわゆる「仙覚本」で、近世の版本の祖になっている。また仙覚は、抄注ではあるが精細な『万葉集註釈』を著わした。これが権威ある注釈の最初のものである。仙覚の学説を継いだ由阿は、難語の解釈をして「詞林采葉抄」を著わした。近世になって、契沖は『万葉代匠記』を著わし、文献学的方法を以て漢籍仏典を広くあさり、精確な解釈を示して、万葉研究に一時期を画した。また、賀茂真淵は『万葉考』や『冠辞考』を著わし、万葉の歌を「ますらをぶり」として重んじた。真淵の門下である橘千蔭は『万葉集略解』を成し、簡略ではあるが二十巻全体の注として広く用いられた。以後、荒木田久老『万葉考榷落葉』、橘守部『万葉集墨繩』『万葉集檜媚手』などが書き継がれ、江戸末期に至って鹿持雅澄が『万葉集古義』を著わし、従来の諸説をはば集大成した。

近代に至ると、佐佐木信綱・橋本進吉・武田祐吉・千田憲・久松潜一による『校本万葉集』、正宗敦夫の『万葉集総索引』が成って、万葉研究は飛躍的に進み、昭和に入ると、武田祐吉（『万葉集全註釈』）・窪田空穂（『万葉集評釈』）・佐佐木信綱（『評釈万葉集』）・土屋文明（『万葉集私注』）・沢瀉久孝（『万葉集注釈』）がそれぞれ全巻にわたる注釈を完成した。

現在、専門の学会が発行する機関誌だけでも、『万葉』（万葉学会）・『美夫君志』（美夫君志会）・『上代文学』（上代文学会）・『古代文学』（古代文学会）などがあって、日ごとに研究が深められている。

巻	巻二	巻三 三三 三三		
部立	挽歌 二四 一四	雑歌 三三 三三 三三	警歌 三三 三三 三三	挽歌 三三 三三 三三
歌体と歌数	長六 短六 一四	長二 短二 二六	短三 三三	長九 短六 六五
排列	年代順	年代順	年代順	年代順
時代	齊明 元正	持統 聖武	持統 聖武	推古 持統 聖武 天平十六年
作者総覧	有間皇子 倭大后 高市皇子 日並皇子 丹比真人	長意吉麻呂 額田王 持統天皇 穗積皇子 河辺宮人	紀皇女 笠女 大伴家持	聖德太子 山前王 河辺宮人 余明軍 高橋朝臣
	山上憶良 舍人吉年 大来皇女 置始東人 (笠金村歌集)	志一雙 長意吉麻呂 長田王 刑部垂麻呂 高市黒人 丹比笠麻呂 小田事 大納言大伴卿 門部王 波多小足 釈通観 山上憶良 上古麻呂 湯原王 若宮年魚麻呂	沙弥満誓 藤原八束 佐伯赤麻呂 市原王 大伴百代 大伴駿河麻呂 大伴坂上郎女 余明軍 大網主人	大津皇子 柿本人麻呂 大伴旅人 大伴養人 大伴書持
特徴	卷一・二のような天皇の御代ごとの標目はない(以下の巻々も同じ)。警歌という表現上の技巧による分類が見られる。	卷一・二の拾遺・統撰ともいうべき部分を中心に、大伴氏とその関係者の作品を加えて編纂し直したものと云う。表意文字を主とし、字音仮名を主とする表音文字を併用。		

卷五 主三	卷四 器四
雑歌 主三	相聞 器四
長一〇 短一〇	長七 短三 旋一
二四 年代順	言元 年代順
聖武 神龜五年 天平五年	仁德 (舒明) 齊明 聖武 天平十五年
大伴旅人 小野老 沙弥満誓 史氏大原 佐伯子首 田氏肥人 榎氏鉢呂 高氏海人	仁徳天皇妹 吹突刀自 慕檀越妻 三方沙弥 志貴皇子 大伴女郎 聖武天皇 門部王 丹生女王 大伴百代 大伴四綱 余明軍 大伴家持 佐伯東人 湯原王 安都年足 春日成 石川広成 大宅女 藤原郎女
山上憶良 栗田大夫 大伴百代 山口若麻呂 板氏安麻呂 高氏義通 田辺真上 土師御道	岡本天皇 舍人吉年 柿本人麻呂妻 丹比登麻呂 中臣東人 常陸娘子 海上王 高田女王 大伴旅人 山口若麻呂 沙弥満誓 大伴坂上大嬢 山口女王 池辺王 紀女郎 大伴像見 河内百枝娘子 安都麻呂 安都麻呂娘 藤原久須麻呂
藤原房前 大伴大夫 阿部奥島 丹氏麻呂 荒氏福布 磯氏法麻呂 村氏彼方 小野園堅	額田王 田辺櫛子 安倍女郎 当麻呂妻 大伴安麻呂 藤原麻呂 大伴宿奈麻呂 笠金村 賀茂女王 葛井石足 門部大成 大伴稻公 大神女郎 八代女王 大伴駿河麻呂 安倍虫麻呂 大伴千室 巫部麻呂娘子 丹波大女娘子
紀井大成 土師百村 張福子 小野宿奈麻呂 志氏大道 高氏老 門部石足	鏡王女 柿本人麻呂 駿河采女 草嬢 石川郎女 大伴坂上郎女 安貴王 大伴三依 土師水道 麻田陽春 高安王 笠女郎 佐伯東人妻 佐伯赤麻呂 市原王 厚見王 粟田河女王 大伴田村大嬢
旅人周辺説がある。主として	巻三と合わせてひとまとまりの形態を成す。巻二相聞の拾遺・続撰ともいうべき部分を一卷に独立させたもの。巻の後半には殊に家持などを中心とした大伴家関係の歌が多い。 表意文字を主とし、字音仮名を主とする表音文字を併用。